



meil fgakusya-shien@abelia.ocn.ne.jp



## 飯田 俊男

さて、支那の制度が始まり一年半が過ぎました。改めて感じる事は、ホームヘルパー制度が地域での生活を支えるにはこんなに効果的だったんだという事です。「地域での生活は絶対に無理だよ。悪い」と言わないから施設にいた方が良いでしょう」と言われ続けた方が現実には地域でしっかりと暮らせています。この方々の生活を支えているのは紛れもなくホームヘルパーです。


一人暮らしの身体障害の方の家に、毎日ヘルパーさんが食事づくり

やお掃除、お風呂の介助に入っています。通院や外出もヘルパーさんが付き添ってくれるために、皆さん思い切つて施設を出て良かったと話されています。学校出たての若いヘルパーさんに「趣味は？出身はどこなの？家族を大事にしないとダメだよ」と逆に気を遣ってくれたり、何ともほのぼのとした光景もあります。

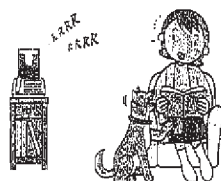
知的障害のある主婦のお宅にもヘルパーさんが入っています。こちらも旦那さんや子もさん達から料理の腕があがった、毎日あつたかいお布団で寝られる、家の中がきれいになったと大変喜ばれています。

コンサートやイベントの付き添いは、利用者さんと同年代のヘルパーや同じ趣味を持つ人を組み合わせたりとちよつとした工夫を凝らしてくる事業所もあります。

この他にもいろんな形でたくさんの方にこのホームヘルプサービスは喜んでもらっています。しかし誤謬が多いのも事実です。事業所自体が少ない、男性ヘルパーや重い障害に对应できるヘルパーが少ない、制度自体が周知されていない、申請しても役所が希望した支給量を出してくれない等です。特に希望しても役所が認めてくれないと言つ点に關して



は、我々コーディネーターが利用者と一緒に行政にその必要性を訴えた  
りする事もします。




グルーブホームも支費制度の一つです。この十一月にふる里学舎がバックアップする形で「グルーブホーム明神」が開設されました。今まで入所施設で生活していた女性四名の新たな生活が始まります。親御さんの中には、娘はふる里学舎の生活を満喫しているのに更何故かどうしてもいかなきやいけないのですかと不安を漏らす方もいらつしやいます。準備期間として、昨年度の一年間ふる里学舎の敷地内にある一軒家を利用してグルーブホームの前段階のような経験（自活訓練事業）をしてもらい、ある程度成果が見えていた事と、何より本人がその気になっていた為にとりあえず進めることにしました。方へ、うまく行かなくてもふる里学舎に戻つてこれらる制度もあります。この辺りの事を説明し、家族の方には何とか納得していただきました。ホームヘルパーを自宅に派遣させる時もそうでした。よく解らないので拒否される人が多くあります。

ふる里学舎が開設した平成五年當時は、在宅支援と言つたら「緊急一時保護事業」今の短期入所、しかも文字通り冠婚葬祭など緊急の場合にしか使えない制度でした。今では家族が海外旅行に出かけ介助する人がいないから、或いは本人の気晴らしにという理由でも利用出来るようになりました。わずかに十年で随分

と福祉の制度も考え方も変わりました。

先日、県庁雪櫃社課の竹林課長さんに声をかけていただき、県内の中核地域生活支援センターのスタッフとで福祉先進県と言われる滋賀県の甲賀地域を視察してきました。人口十万人のニリアには、知的・身体・精神の地域生活支援センターが配置され羨ましい限りです。利用者の相談にはこの地域生活支援センターのコーディネーターが中心となり当事者や行政の担当者、関係者を迎えてとことん話を詰め改善策を講じています。見えてきたニーズを曖昧にしないで現場レベルでみんなで話し合つて何とかなる姿勢が印象的でした。

この十月からスタートした中核地域生活支援センターは、開始して一ヶ月が過ぎました。「対象者横断的」と言うけれど、何でもかんでも出来るなないだろう。出来るなどとうぬぼれるな」「今だつてきちんとした相談窓口はある。中核なんて必要ないだろう」きつい一言を頂く事もありました。一方で「せつかく出来た事業なんだから、最初から潰すような事をしないで、皆できちんと育てていかないと駄目じゃない」と冷静に周りを論してくれる方もおられます。何処に言つても相手になれなかったのに親身に話を聴いてくれてありがたかった。深夜にも関わらず本当に動いてくれるとは思わなかった。と言った感想もいただきました。先日も精神的疾患から引きこもりになつてしまつた方と一緒に役所



「こういう病氣だから自分ひとりじや何もできなかった。本當に助かりました」と帰り際にポツリとお礼を言われた時には、正直涙が流れるほど嬉しかったです。



そこうしている内に、イラク武  
装勢力による日本人殺害のニュース  
が飛び込んできました。長岡市の土  
砂崩れに続くジョッキングな報道を  
きよんとした表情で眺めている小  
学生の娘たちは、この現実をどのよ  
うに受け止めているのだろうか。親と  
して、何か言わなきゃと思つても、  
おぼあちやんの「大愛なえ」に続く  
言葉は出ません。

平和なくして協社は成り立ちません。経済が破綻しても駄目です。ホームヘルプやグループホームも、入所施設だつてお金が無くなつたらどうなるかわかりません。国は支援費の支給量に上限は設けないと言つても、支援費は国の予算だけでは無く、都道府県や市町村の負担もあります。財政的に豊かでない自治体はやりたくたつて出来ないのが現実です。一見平和そうに見えますが、日本の協社も今、大変な状況にあるのもまた現実です。

（ふる里学習会地域生活支援センター）  
地域総合コーディネーター）

## 障害をもつ子の

## いる暮らし

小澤 美佳

「自閉傾向のある発達遅滞ですね」

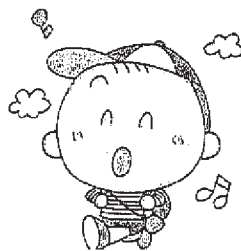
「・・・そ、それで、どうすればいいんですか?」二歳の長男に対して下された医師の診断に、すぐる思いで質問した私。「こちらでは何もできません。市に相談して下さい。これからが大変ですよ」

思い切り打ちひしがれた帰り道、ふと立ち寄った書店で、ある本が私の目に飛び込んできた。「障害をもつ子のいる暮らし」・・・まさに私にドンピシャのタイトルだった。

この本は、専門医的解説を踏まえながらも、障害児と「共にある暮らし」や「障害」そのものとの見え方が、育て方や療育といった、よくありがちな話とは少し違った切り口で語られている。

その冒頭に、いきなりこうあった。「異常と障害のちがい」

「異常」というのが、個人の状態を個人自身において科学的に規定する概念であるの



に対し、障害は個人の状態いかに関わらず、社会との関連で生じる概念です」

「従って、障害は、社会のあり方によって規定されるところが大きいということ

が言えます」

そうか・・・「もうボロボロと音が聞こえるほど目からうるこが落ちまくった。つまり、障害児だからって、なにも特別な子育てをしなくてもいいんだ。頑張ってる地域社会なのかも・・・」

それから早九年、マイペースな長男は二人の弟達のバトンを尻目に、不自由な現代社会を彼なりに謳歌しているようだ。そしてこれまたマイペース

な親は、時折受ける専門家からの指導をテキストにやりやすう一方、長男の力ワイイ写真入りのパンフレットを作成して近所中のお宅やお店に配り歩いた



り、詫言をいれたり。「家族だけじゃ、だめなの。皆さん、この子のこと、どうか理解して協力してね」と控えめに(?)訴えながら・・・成長するに従ってその相手も学校・警察・施設・役所と拡大してゆけれど、困難な相手ほどなぜか闘志がメラメラと湧き起るのにはなぜでしょう?

本に書いてあったことで今ひとつ実感できなかった。「障害児との暮らしは実に多くの素晴らしいものをもたらす」ということも、今はわかる。世の中には他人のこゝと・地域のことを我がこととして考えている人が大勢いること、個性に優劣は無いということ、社会の理不尽さとそれに向かっている勇氣、全て長男がグータラ母に教えてくれた。

今も「こゝで、私の時のように、医師や専門家から「これから大変ですよ」と告

げられている家族がいるのだろうか。そうではなく、「大丈夫、お母さん、今の世の中はどんな子でも安心して暮らしていけるんですよ」と言われるような社会になつて欲しい。ふる里学舎の職員の方々からもエネルギーを貰いつつ(吸い取っているのではアリマセン)、そう願う今日この頃である。

(小澤 大海 母)

## ふる里学舎での

## 研修を終えて

溝口 達弘

四日間、本当にお世話になりました。皆様方のご親切により、たいへん充実した研修を送ることが出来ました。心より御礼申し上げます。

ふる里学舎で研修を受け、私は、強い衝撃を受けました。それは、ふる里学舎が、自分がもし知能発達障害だったら、あるいはもし自分の子供がそうだったなら、入りたい、入れたいと思う施設だったことです。父が小児科医だったこと、学生時代のボランティア活動や、医療従事者として勤務した経験もあることから、これまで、多少とも施設を目にしてきたつもりです。

しかし、自分が入りたいと思った施設はほとんど皆無です。そして、これほど入所者がのびのびしている施設は初めてでした。実は、研修中、施設では普通に目にするような、「終始いらしている子」や、「職

員に怯えた目をする子」を探したのですが、これが全くもって見つかりませんでした。感動しました。

ふる里学舎での研修で、私は、自分の認識を変える必要に迫られました。というのも、私は、施設が多少なりとも劣悪な環境に陥つてしまっているのは、現実、しょうがないと思つていたからです。もちろんそれは、



良い悪いで言えば当然悪いことで、認めたことでは決してないのですが、施設というのは、親御さん達の我が子をもつても「入れざるをえない」という強い縛られた強いニーズの下に存在していること、一方、ニーズに対して施設は数が少ないこと、という理由により、競争原理は働かず「どの施設も空き無し」であり、即ち「劣悪な(環境にお金をかけない)施設は儲かる」という構図になつてしまつており、良心的なサービスを提供し、追究し続けるような施設はますます難しいものと考えておりました。

ふる里学舎の様々な取り組みを見せていただき、「ここまでやっているとこゝろもあるんだぞ」、「こゝまでのサービスを提供することが出来るんだぞ」という強いメッセージを突きつけられた感じがします。本当に嬉しく心地よい衝撃でした。施設無用論など言われる昨今ですが、ふる里学舎を見て施設が無用とは言えようはずがありません。今後、行政の場で勤務するにあたり、「行政が何を出来るのか」考えるためのヒントを得

ふる里学舎で、沢山いただきました。特に、今ある施設全体のサービス向上を図るためにどうすればいいのかについて考えながら業務に動かしみたいと思っております。

ふる里学舎という目から鱗のクオリティでサービスを提供しているところが実際にあること、ふる里学舎にいる入所者・通所者そして職員の方の素晴らしい表情、本当に貴重な体験でした。ありがとうございました。

厚生労働省の平成十六年度新規採用職員さんが研修の一環として、ふる里学舎で四日間を過ごされました。

その時の感想を寄せていただきました。

## 編集後記

重症心身障害児(者)を守る会の交流キャンプに同伴させて頂いた。

重症心身障害者を持つ利用者と関わりを持つようになり、一年半が過ぎるが、この旅行では多くの経験ができたと同時に、

車両の乗降や入浴については体力と神経を要する重労働であると改めて感じた。そして、日常的に行っている家族の方々には頭が下がる思いだった。様々な思いを胸に帰るはがが・・・

あれ・・・今日は十一月一日、や・ば・い・今日は休日の発行日だ! 急いで学舎に帰ろう!

取り急ぎ佐藤五十二号をお届けします。

宮崎理